

アフロキューバの「神話」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越川, 芳明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20528

アフロキューバの「神話」

越 川 芳 明

大西洋を舞台にした奴隷貿易が始まるのは、16世紀頃からだと言われているが、アフリカからキューバへの奴隷貿易が活発になったのは、さとうきび栽培と砂糖生産が盛んになる19世紀のことである。19世紀の半ばで、奴隷貿易はピークに達する (Brandon 52-55)。

キューバに連れてこられたアフリカ人の中で一番多かったのは、キューバで「ルクミ」と呼ばれたヨルバ語族の人たちである。現在のナイジェリアとベニン共和国にいた人たちだ。

彼らが思想として持っていたのは、オリチャ *Orisha* と呼ばれる精霊たちへの信仰と、最高司祭ババラウオ *babalawo* が取り仕切るイファ *Ifa* と呼ばれる占いの体系 (御宣託) である。

イファには、256の運勢が存在する。その一つひとつの運勢のことをオドゥ／オドゥン *odu/odun* と呼ぶ。イファは、オルンミラ (キューバでは、オルーラとも) と呼ばれることもあり、その場合は、占いの精霊を意味する。

256通りの運勢のそれぞれは、神話時代において解決された「原型的な状況」を語り、それによってわれわれ現代人の抱えている問題への解決策を探りだす仕組みになっている。一つひとつの運勢の中には、オリチャたちの神話が組み込まれており、われわれ現代人の問題解決にも、そうした目に見えない存在の関与があるということを意識させる。というのも、死者を含めて、オリチャは靈魂の共同体に組み入れられていて、オリチャの放つエネルギーが個人のトラブルに対して効果を発揮すると考えられているからだ

(Murphy 20)。

一つひとつの運勢には、何千もの聖句が付随しており、ババラウオはそれらを暗記して、占いの際に、適切な聖句を選びだし、それを朗読して依頼者に聞かせる。さらに、聖句は儀式を正当化する神話を中に含んでいるため、どのように儀式をとりおこなうか論争がおこったときに、それを解決するためにも引用される。「ババラウオは多くの聖句を知っていることが期待されており、それゆえに宗教の権威として認められる」(Bascom 12)。

アフリカのイファの「聖句」の中には、オリチャにまつわる神話や民話、呪文、歌、ことわざ、そして重要な犠牲「エボ」の方法などがすべて含まれている。それに対して、キューバの「サンテリア」(オリチャと習合した^{サント}聖者を信仰することから、蔑称として白人たちからそう呼ばれた)のイファでは、「聖句」は「祈りの言葉／祈禱」や「神話」、「ことわざ」、「エボ」の方法に分割されてしまっている。

本稿では、「祈りの言葉」や「ことわざ」や「エボ」などから切り離された、通常、バタキ *pataki* と呼ばれる「神話」を取りあげる。オリチャや動物や植物や魔女などを登場人物にした「神話」の中に、「キューバ化」「クレオール化」して、文化的に変容した特徴が見られるかどうか見ていきたい。

出典としては、さまざまな「神話集」が存在するが、2013年以降、わたしがババラウオとして修行するなか、自分のパドリーノから手渡されたプリント(著者名は不明)を基にしている。その他に、パドリーノがババラウオ仲間から教わったものも伝授してもらい、補強してある。いずれにしても、近代的な概念である「オーサーシップ(著作権)」が曖昧であり、科学的な見地からすれば、その正当性や信憑性が問われそうだが、それは、時のメディアを牛耳る支配者の論理であり、活字に残された史料でしか「歴史」を語ろうとしない学者の論理と言えるかもしれない。

アフリカから連れてこられた奴隷のような被抑圧者は、口承や絵文字など、活字によらない「歴史」の伝達方法を編み出してきた。キューバに渡ったヨ

ルバの人たちの「神話」も、もともとは口承で伝達されていたものだが、おそらく奴隷解放以降に、20世紀になって、誰かが活字にまとめ、他の人たちによって次々と付け加えられてきたのだろう。だから、有力な「著者（たち）」がいて、一つの体系化された「神話」のテキストがあるのではなく、むしろ、無数の編集者や翻訳者が介在して、アフリカ発の「神話」をキューバ化してきたと考えるのが自然なのはないだろうか。

次に挙げるのは、256通りある運勢の中の16個である。二つの出目が揃ったものをメイェ（*meyi*とも *melli*とも記述される）と呼ぶが、それらの典型的な例を取り上げて、神話時代と奴隷時代と現代とをつなげることができるか、検討したい。

16のメイェ

1 ババ・エヨベ *Baba Eyogbe*

I I
I I
I I
I I

(例1)

超絶神オロドゥマレは、この地球上での人間の生き方に不満だった。イルンモレの中からババ・エヨベを選び地上へと送った。ババ・エヨベは、占いの卓と聖なる箱を持って、占い師オルンミラに姿を変えていた。誰も後を追う者はいなかった。

三人の異邦人が「詩歌の土地」と呼ばれるところへやってきた。オルンミラは三人に占いをしてあげた。占いによれば、三人が空腹を抱えているときに、死んだ犬と出くわすという。

さらに、占いによれば、三人は一人ずつ死んだ犬のために詩を歌うことに

なるが、一番素晴らしい詩を作った者がお金を払うことなく、食事ができるだろう、ということだった。だが、三人は占い師^{あざわら}を嘲笑うだけだった。

やがて、空腹の三人は死んだ犬に出くわした。

一人の異邦人が言った。「この野良犬だって、生きていたとき、食ったものに金を払ったことがなかったぜ (笑)」

もう一人が言った。「この野良犬、生きていたときに食べていたものは、すべて生だ。料理されたものなんかなかったぜ (笑)」

三人目が言った。「この野良犬、シエスタ (昼寝) して夢見ていたが、死ぬなんて夢にも思わなかったはずだぜ (笑)」

そこに、子どもが一人やってきた。いたずらが得意なエチュが変装していたのだ。三人が食堂を知らないか尋ねると、子どもが言った。ぼくを食事に招いてくれて、皆さま、ありがとうございます、と。

三人は仕方なく食事に誘ったが、子どもをだまそうとした。宿屋の主人にあらかじめ頼んでおき、食卓の上にソーセージを3等分してのせてもらっていたのだ。

だが、エチュは魔法を使って、食卓の近くのランプを落とした。真っ暗な中で、エチュは3等分されたソーセージを全部食べてしまい、その場から立ち去った。

エチュはあとでオルンミラから叱られたが、それ以降、この地上でオルンミラの最初の弟子になった。

注釈

1 この「神話」は、古い精霊オルンミラの、この地上での顕現について語っている。絶対神の怒りが発端で、人間に罰を与えるために降臨したという。目に見えない精霊の存在や信仰をないがしろにしたり、子どもをだましたりするなど、三人の異邦人はモラルの欠如ゆえに、変身するオリチャにいっぱい食わされる。宿屋の主人の「ソーセージ」(加工食品)に、強いて言えば、

この「神話」の「キューバ化」の部分が見られるかもしれない。

2 この運勢には、オルンミラを助けるエチュ（エレグア）という構図の由来が見られる。エチュはオルンミラに忠実な戦士のオリチャで、たびたびオルンミラを救う。逆に言えば、イファの儀式では、エチュの顔を立てることを忘れない。必ず儀式の最初に、数あるオリチャの中でもエチュに対して、ココナツの破片4つを使ったオビ占いをして、エチュのご意向を伺うことになっている。

(例2)

オロフィンが地球を創造しようとしたときのことだ。オロフィンはコーラという木の実を投げ、それが海に落ちた。

そこから、一本のヤシの木と、毛の塊のような髪を持った七人の王子が生まれた。その中に、オランミヤン・チャンゴーがいた。かれが一番小さかった。

オロフィンが王子たちに与えたものは、すべて良いもので、みんなが受け取った。

だが、チャンゴーには一枚の布きれと鉄の杖だけしか残ってなかった。チャンゴーは、ほかの王子たちにいいものがすべて奪われたと思い、海水しかなかった地球を揺り動かし、海中に土を埋めて山をつくり、一羽の鶏を放った。鶏はごみを掃除しはじめた。鶏は海上で大きく成長し、土地ができたところまで飛んでいき、それを自分のものとした。

ほかの王子たちは、チャンゴーが持っているもののほうがずっといいと思った。王子たちは自分の土地を鶏に奪われ、チャンゴーの持っているものを奪おうとした。

だが、チャンゴーの鉄の杖は強力な防御の武器になった。チャンゴーはその武器を持ち、決着をつけようとした。

王子たちは、地球をみんなで共有しなければならない、とチャンゴーに申

し出た。チャンゴは答えた。もちろん、そうしてもいいぞ。だが、統治するのはわたしだ、と。

かくして、チャンゴはオヨの土地をみんなに分配してやり、オヨに最初の王朝を築き、最初の王様になった。

注釈1

地球創造の「神話」にはたくさんのバリエーションがある。超絶神オロドゥマレによって、平和を司るオバタラが地球創造の任を与えられたが、ヤシ酒に酔ってしまい、その間にオドゥドゥアに出し抜かれて、オドゥドゥアが地球を創造してしまったというエピソードもある。何れにしても、神が直接手を下すのではなく、精霊の誰かを遣わし、精霊が鶏の手（脚）を借りて、海に陸地を作っていく。

注釈2

ナイジェリアの都市国家オヨの最初の王さまは、チャンゴだったと言われている。七人の王子の中で、一番小さく、しかも分け前も残りもの（一枚の布きれ、鉄の杖だけしか残されていなかった）だったが、そうした逆境を持ち前の勇敢さや、鶏のサポートによって克服する。ここに描かれたチャンゴの交渉上手やきつぶの良さや潔さは、アフリカの「神話」の中にあっただものなのだろうか。それとも、キューバで脚色されたのだろうか。それらは指導者としてキューバ人に受けそうな性格かもしれない。

2 オイエクン・メイェ *Oyekun Meyi*

II II

II II

II II

II II

(例1)

いつも胃腸に病を抱えている雷神チャンゴーの息子がいた。体がとても弱っていて、常に死神が背後に迫っていた。

ある日、かれは占いの精霊オルンミラに占ってもらうことにした。オルンミラがオソデ占いをすると、この運勢が出た。

そこで、オルンミラは同じような悪い状況に陥らないように、かれに犠牲「エボ」をしなければならぬと言った。今回だけでなく、つねに「エボ」をやり続けなければならない、と。

チャンゴーの息子は、犠牲の「エボ」をささげ、その包みを宮殿の遺跡がある場所に持っていった。オルンミラに命じられた通りに、「エボ」の包みを木の下に置こうとすると、突如、その木が倒れて、かれは大きな恐怖に襲われた。だが、驚いたことに、木の下から宝ものが出てきたのだった。

その宝ものを家族で山分けした。

だが、かれはオルンミラに言われたことを忘れていた。「エボ」をやり続けなければならなかったのだ。さもないと、不幸に見舞われ、病気になり、やがて死にいたる、と言われていたのだった。

注釈1

この運勢が出た場合、健康と繁栄を獲得するために、絶えず犠牲・生贄という意味の「エボ」をささげなければならない。そうしないと、幸運は逃げていくし、不運は回避できない。イファ占いでは、占いの体系とともに、「エボ」の体系も重要である。どのような犠牲をどのようなオリチャにささげるべきか、細かい規則があるのだ。ここで説かれているのも、継続して行うべき「エボ」の重要性であり、これは特にキューバ的とは言えない。また、「宮殿の遺跡」も、キューバ的というよりアフリカ的な建物を連想させる。

3 イウォリ・メイエ *Iwori Meyi*

II II

I I

I I

II II

(例1)

新年を迎えるにあたり、オロフィンはずべてのオリチャたちを召集して、その年、誰が世界を統治するかを決めようとした。

海の女神イエマヤーは、集会に行く前にオルンミラのところへ行った。オルンミラが彼女のために占ってあげると、この運勢が出た。

そこで、羊1頭 *abo*、2羽の雄鶏 *akuko meyi*、海の砂、その他の成分を使って、犠牲「エボ」をおこなった。

それから、オルンミラはイエマヤーに言った。

「あなたが希望する立場が得られるように、この羊の頭を集会にもっていきなさい」

ずべてのオリチャは自分が統治者に選ばれたいと思いながら、オロフィンに自己紹介をした。

それが終わると、オロフィンが尋ねた。

「あなた方はみな遠くからやってきたが、何を持参しましたか」

イエマヤーが唯ひとり、前に進みでた。

オロフィンは言った。「あなたは頭を持ってきましたね。だから、あなたがトップ(頭)になりなさい」

かくして、イエマヤーがその年、世界を統治することになった。

注釈1

この運勢は、イエマヤーの「イサライエ」 *isalaye* であり、それは彼女が地球に降りてきた場所である。イエマヤーの行為を通して、イファ占い(集

会前にオルンミラのところへ行く」と、犠牲「エボ」（統治者になるという幸運を手に入れるため）の重要性が説かれている。ここには、特に「キューバ化」の特徴は見られない。

4 オデイ・メイェ *Odi Mayi*

I I

II II

II II

I I

(例1)

ケレイェ *Keleye* は、川の女神オチュンの娘だった。

オチュンは自分の子どもたちが次々と亡くなってしまい、ひどく悲しみ苦しんでいた。

彼女の心は安静を知らなかった。アビク *abiku* (死者の霊) がつねにその身に迫っていたからだ。

ケレイェは困り果て、オルンミラにオソデ占いをしてもらいにいった。すると、この運勢が出たのだった。

オルンミラは言った。

「あなたがなすべきことは、母親オチュン・イユムに気持ちを向けることだ。これまでヤム芋を食べたり、人生の快樂だけに気をとられていて、母親の世話をしてこなかった。あなたはいつも自分のプレスレット *akofá* をはめ、黄金色の葉草風呂につかる必要がある。それで、あなたは子孫繁栄と商売繁盛を手に入れることができる。それから、母親とオルンミラには、両足を縛った雌鶏をささげ、お祈りしなければならない。また、母親と一緒に生きている二つの霊オトロ・オフォンとエウエヒを崇拝しなければならない。それらをした後に、あなたには円満な夫婦関係が訪れ、子どもを持つことができるだろう」と。

ケレイェはイファ占いのアドバイスに従った。

夫婦関係は円満になり、子どもができて、この地球で幸福になることができた。

注釈1

この運勢では、オチュンの子どもたちがいつも腕にブレスレットをしている由来が語られている。これらブレスレットが擦れて鳴る音は、オチュンを喜ばせ、泣かせない。なぜならば、そもそもオチュンは悲しみ苦しむオリチャであり、つねに数多くの悲しみ苦しむ女性を助けてくれるオリチャだからだ。

注釈2

この運勢で、オチュン・イユムが生まれたという。オチュンには、化身（アバター）が数多くいて、このオチュンは、特に川底に住み、妊娠していないのに腹が膨れているという特徴がある。さらに、聴覚障害で、とても美人だ。彼女の道（運命）には、5つの角笛、5つのハンカチ、5つのマチェーテ、1頭の白馬がいる。たくさんのコーラの実が外に置かれているという。

注釈3

オチュン・イユムには、25人の男がいて、25個のブレスレットをしている。25個の「アコファ（イファの女用の腕輪）」である。彼女は縫い物、仕立てとメロディーが好きなので、彼女の祭壇にはカウベルが飾られる。銀の所有者であり、蛇の飼い主でもある。

注釈4

白馬は「アルグエロ」*algueró* と呼ばれ、その背にはエロ *ero*、オビ *obbi*、コーラ *kolá*、オスンナボル *ozunaború*、蔦 *hiedra* を積んでいる。青銅色の目標塔（パイロン）と、スープ用の容器がその上に乗せられる。お供えはひょうたんで、オクラと一緒にささげられ、あとで川に捨てられる。その他に、大

きな斧もある。

注釈5

オトロオフォン *Otoro ofon* とは、オチュン・イユムと一緒に暮らす精霊のこと。それにささげる「エボ」としては、牛の頭、死者の頭（子ども）、鶏の頭、川の砂、エロ、オビ、コーラ、オスンナボル、アイラ。お清めは、ゴールドンボタン、セイバ、カンゾウ、パンテラ、そしてグレープバイングラスなどの薬草で行う。ヤシの実を食べる。

エウエヒ *Ewueji* は、オチュン・イユムと一緒に暮らす、乙女の血でつくられた人形で表される子どもの精霊（エグンオモケケレ *Eggún Omokekeré*）のことである。それへの「エボ」としては、エロ、オビ、コーラの実、オスンナボル、トラの頭、タカの頭などを丘の上でささげる。お清めは、アラクラシロとグアニナ（エウエトモデ *ewetomodé*）などの薬草で行う。この人形は、男のペニスを食べるという。

5 イロソン・メイェ *Iroson Meyi*

I I

I I

II II

II II

(例1)

とてもひどい状況に陥った男がいた。仕事を求めて、オルンミラの家に来てきた。

オルンミラが言った。「わたしにはお金がないので、仕事をしてもらっても賃金を払えない。でも、わたしとパンを分かち合うことならできる」と。

男はオルンミラのために長いこと働いた。

ある日のこと、幸運がやってきた。

オルンミラにお金ができ、男に賃金を払うことができるようになった。

オルンミラが聞いた。

「この土地を離れる前に、賃金をもらいたいのか、それとも、わたしのアドバイスをもらいたいのか」

それに対して、男は言った。

「これまで、おれはずっと貧乏だった。これから先、おれが生きていけるように、どんなアドバイスをくれますか」

オルンミラは言った。

「沈黙は金なり。無駄ぐちを叩かなければ、あなたの頭は無事でしょう」

男は旅に出て、とある居酒屋にやってきた。

食事が出てきて、しばらくしてそこの店主が姿を現わした。

首に鎖をつけた女を連れていた。主人はテーブルの脚に女を縛りつけ、残飯を女に投げつけた。

男は好奇心に駆られて、質問をしようとしたが、オルンミラのアドバイスを思い出した。

男が長いこと黙っていると、なぜこんな風にこの女が縛りつけられているのか、どうしてあなたは聞かないのか、と店主が尋ねた。

男は答えた。「おれには関係ないことなので」

店主は言った。「この女は、たった今、自由の身になりました。わたしは、誰かが店にやってきて、どうしてわたしがこんな行動をとるのか、質問しない者が出てくれば、その日に、この奴隷の女を自由の身にすることに決めていたのです」

それから、店主は骸骨でいっぱい奥の部屋に男を案内して言った。「これらの骸骨は、すべて質問した連中のものです」

そして、店主は男に多額の賞金を与えたのだった。

注釈1

オルンミラにはお金がないが、イファ占いによるアドバイスはお金以上のご利益があるというたとえ話。オルンミラが男に与えた「黄金のアドバイス」は、「沈黙は金なり」という文字通り、お金になるアドバイスだった。一方で、これまで質問して殺された人々の骸骨に象徴されるように、好奇心が強すぎて人のことがらに口を挟むことを戒めてもいる。このエピソードには、とりわけキューバ的と思える表現は見当たらないが、犠牲への言及がないあたりが強いて言えば、キューバ的だろうか。

6 オファニ・メイェ *Ojuani Meyi*

II II

II II

I I

I I

(例1)

かつて、人類は絶対神オロドゥマレの頭の中に埋められていて、双子の「イベジ」を信仰していた。

イベジは貧困に苦しんでいて、王さまのカボチャを盗もうとした。

すると、突然、地球が割れて、大水が出現した。

そこで、人類は魚を育てようとした。だが、火の魂が浮かんだ。それは土の塊になった。人類はオルンミラに占いをしてもらい、オロドゥマレに犠牲の「エボ」をささげた。

イベジ兄弟は、その土の塊からどろ亀を取りだし、人類を繁殖させるために、どろ亀を人類と一緒に暮らさせた。

どろ亀の母が死ぬと、どろ亀の甲羅を屋根に使い、人類の家を稲妻から守ることにした。

注釈1

この地球創造の「神話」には、キューバ化の要素は見られないが、原初的な創造のプロセスが示唆されている。イベジは、チャンゴーとオチュンのあいだに生まれた双子のオリチャ。双子は魔力を持っていると皆から畏怖され、母親は魔女と見なされ村から追放されるのがならいだった。双子の母のオチュンは育児を別の女（オヤ）に託したという。キューバではカトリック教会の「聖コスメイ」と「聖ダミアン」と習合している。

イベジがカボチャを盗むと、なぜ大水が出現するのか。それはカボチャが川の女神オチュンの好物だからで、盗みがオチュンを怒らせ川を氾濫させたからだろう。

火の魂とは、火山を司るオリチャ「アガユ」のことだ。

「土の魂」とは、大地や農業を司る「オリチャ・オコ」の領域。

注釈2

どろ亀 *ayapa* は長生きの動物であり、繁殖・繁栄のために人類に与えられた。チャンゴーへの「エボ」では、どろ亀がささげられる。

稲妻と雷は、チャンゴーが司る領域で、どろ亀がその甲羅で稲妻から人類を守るというのは、どろ亀が人類の身代わりにチャンゴーにささげられたからである。

どろ亀の母とは、チャンゴーの母「イェマヤー」で、人類への愛と保護を司る。

7 オバラ・メイェ *Obara Meyi*

I I

II II

II II

II II

(例1)

オルンミラは、山奥に住んでいる羊飼いのために占いをしてやり、魔女たちの呪いにかからないようにアドバイスをしてあげた。

だが、羊飼いは生贄をささげなかった。

日曜日に、羊飼いは気分転換しようと外出した。

しばらく歩いていると太鼓の音が聞こえてきた。音のする場所に行ってみると、バンベをしていて、たくさんのきれいな女性たちが踊っていた。

女性たちは羊飼いの姿を見つけると、飲み物の入ったグラスを持ってきた。

羊飼いは飲むとたちまち、眠たくなった。

羊飼いが山奥で目覚めると、顔は青ざめ、体も弱っていて、馬に乗ることすらできなかった。

それでも、なんとかオルンミラの家にとどり着くことができた。そこで、失った活力をもとに戻してもらい、二度とあのような目に遭わないように、魔女の魔力にかからないために生贄をささげたのだった。

注釈1

羊飼いは、怪しい魔女たちにかどわかされて、もう少しで命や魂を奪われるところであった。それというのも、オルンミラによって指示された犠牲の「エボ」をしなかったからだ。ここでも、指示された通りに、迅速に「エボ」をすることの大切さが説かれている。

注釈2

バンベとは、キューバでは夜を徹しての、歌と踊りの「太鼓儀礼」だが、必ずそこでも「エボ」をささげるのが習わしになっている。「エボ」の対象が先祖の霊であれ、オリチャであれ、「太鼓儀礼」のための名目が必要であり、ただのフィエスタではない。

8 オカナ・メイェ *Okana Meyi*

II II

II II

II II

I I

(例1)

オルンミラは、孤独な漁師のために占ってやり、漁師は神に犠牲「エボ」をささげた。

漁師は海に恋をして、魚になりたいと思っていた。

漁師が海辺に「エボ」の包みを持っていくと、大きな海亀に石を投げている男の子たちがいた。漁師は亀を子どもたちから引き離し、海へもどしてあげた。

数日後、漁師は生活の糧を求めて、海に舟を出した。

すると、巨大な海亀が漁師を手招きした。

自分の甲羅に乗ってください、女王の宮殿に連れていきますから、と言った。

それは、まさに漁師が助けてあげた海亀だった。

海亀は漁師を真珠やサンゴでいっぱいの宮殿に案内した。

その中から結婚相手を選べるよう16人の王女を連れてきた。

漁師の粗末な服は、金色の糸やアコヤ貝のボタンで作られた豪華な織物に変わっていた。靴も、真珠をあしらったものになっていた。

漁師の手と足はヒレに、肺は鰓えらに変わっていた。

漁師は、二度と地上に戻ることはなかった。

注釈1

魚になりたいと思った漁師の話。孤独で貧しい漁師が、助けた海亀のサポートで、「異界」に赴き、美しい妻をもらい、金持ちになり、王様になる。

「浦島太郎」の伝説にそっくりだが、「浦島太郎」と違って、元の世界には戻らず、望みどおり別の存在（魚）になり、そのまま「異界」にとどまる。

中沢新一は、「異人」や「異界」の出てくる民族（民話、童話、諺など）は、民衆の歴史意識を反映していると思われ、次のように述べる。「なにもものかの排除や抑圧が個人の自己意識をつくりだすように、ひとつの村の共同意識は、自分にとっての異質な要素の排除や抑圧からつくりだされてくるのではないか」（283）と。この「神話」の漁師は、もともと村の共同体から排除された「異人」であり、漁師にとって村の共同体こそが「異界」だったのだ。

注釈2

この神話には、奴隷として新天地（異界）に連れられていき、アフリカの地に戻れなかったディアスポラの民の「思考」が反映しているかもしれない。つまり、戻れないことがネガティブなことではなく、むしろ好ましいことだと思いたい「奴隷」としての「願望」が込められているかもしれない。もちろん、奴隷状態ではそうした心境にはなりえないが、奴隷革命を起こすことで、そうした境地が現実になる。キューバの奴隷制廃止の半世紀前の1804年に、フランス領サン＝ドマング（現ハイチ）で、奴隷革命が実現していた。

9 オグンダ・メイェ *Ogunda Meyi*

I I

I I

I I

II II

（例1）

オルンミラは、勇敢な戦士であるオグンのために占いをしやり、「エボ」のやり方を教えた。

だが、オグンは強くて勇敢だったので、神への生贄をささげる必要などな

いと思った。

その結果、敵の陰謀にはまってしまった。自分より強い相手によって不利な状況に追いやられ、神の助けも得られなかった。

オグンの家は次第に貧困に見舞われるようになった。

そこで、オグンはオルンミラの家に行き、生贄をささげることにした。

やがて、オグンは旅に出て、たくさんの国を歩きまわった。

とある国を訪れると、巨大な蛇が湖から出てきて、王国を滅ぼそうとしていた。

誰もその怪物と戦おうとしなかった。

そこでオグンは怪物退治を申し出て、戦士として受け入れられた。

オグンが湖の暗い夜陰の中で怪物と向かい合うと、2つの炎の目が見えた。

オグンが第1の矢を射ると、怪物の額に跳ね返って落ちた。

第2の矢を射ると、再び同じことが起こった。

1つの矢しか残っていなかったが、怪物がすぐ間近にいた。

オグンは人間の唾がその怪物には有毒であることを思い出した。

鎌つばきを手にして、怪物の喉をつくことに成功した。

怪物を退治したオグンは、その後、王宮で快適な生活を送ることができた。

注釈1

オグンが戦士として怪物と戦い、それを倒すエピソード。最初、オグンは自分の力を過信していて、傲慢にもオルンミラに指示された、神への「エボ」をないがしろにする。が、貧困と無力に襲われて、謙虚になり犠牲をささげることにする。それによって怪物を倒すことができ、王様に気に入られることになる。ここでも、「エボ」の大切さが説かれている。鉄を司るオグンの能力は、オグンの使う矢の鎌に明示されている。

注釈2

オグンが戦う「怪物」とは、共同体や組織にとっての「外敵」や「難問」の比喩かもしれない。戦士のオグンは、その能力（腕力、潔癖さ）を、自分のためではなく、「共同体」や組織のために使うとき最大の効力を発揮する。「傲慢」や「独りよがり」が最大の敵である。つまり敵は自分の中にいる。これは、キューバの独裁政治家やアメリカの巨大資本に立ち向かった革命闘士たちには受けそうな「神話」だが、キューバ革命以前に、そうした政治的な意味があったのかどうか。

10 オサ・メイェ *Osa Meyi*

II II

I I

I I

I I

(例1)

魔女たちの出てくる悪夢を見る少年がいた。少年はいつも太腿にダメージを与えられていた。

魔女たちは、姿を7つに変えて、あらゆるものを壊滅させていた。

少年は心配で、とても眠る気になれなかった。

少年は、占いの精霊オルンミラの家に行き、神に生贄をささげ、魔女たちの陰謀に対抗しようとした。

魔女の一人は美しい女性に身を変えて、少年の家に来て、一緒に遊びにいかうと誘った。

だが、少年は不審に思って、3匹の猟犬と相談した。もし2時間たっても戻ってこなかったら、探しにきてくれるように、犬たちに頼んだ。

魔女の一人が少年を遠く離れた土地の洞窟へと連れていき、他の魔女たちと取引しようとしたのだ。

だが、犬たちがやってきて、魔女たちをやっつけた。
犬たちは狂ったようにその場で穴を掘り、宝ものを見つけた。
その土地で少年は金持ちになった。

注釈1

魔女の夢を見る少年のエピソード。オルンミラの占いと「エボ」が効力を発揮して、3匹の犬のサポートもあり、少年は魔女の策略を逃れるだけでなく、幸運（富）すらも手に入れる。3匹の犬は、3人の友人かもしれないし、3人の親族かもしれない。いずれにしても信頼できる身近な存在である。この「神話」にはキューバ的な特色は見られない。

11 イカ・メイェ *Ika Meyi*

II II

I I

II II

II II

(例1)

オルンミラは、これから海に出ようとしている船の乗組員たちのために占いをしてあげた。だが、生贄をささげたのは航海士だけだった。

外洋に出ると、船は嵐に巻き込まれた。船はまるで強風に吹かれる一枚の葉っぱのようだった。

乗客と船員たちは、悲しみのあまり、泣きくれた。

海中に身を投げ飛ばされ者もいた。もはやこれまでと思ったとき、突如、嵐がやってきて、全員助かった。

悲嘆は笑いに変わった。

皆が気づいたのは、航海士がいつも冷静なことだった。嵐のときも、まるで嵐の中にいるかのように、落ち着いていたのだ。

悪いことと良いことは、ころころと変わりやすい（人間の禍福は転々として予測できない）。

注釈1

中国の故事「人間万事塞翁が馬」を彷彿とさせるエピソード。運命共同体としての船を救ったのは、嵐であるが、嵐の中であって船を難破させなかったのは、トップの船長ではなく、航海士（実行部隊）の力量である。それをもたらしたのも、イファ占いと「エボ」の生贄であるという指摘が重要。

注釈2

キューバは日本と同じように、周りを海に囲まれている。秋にはハリケーンによく襲われる。苦境に陥る人間の比喩として使われた、嵐の中の船（そして、冷静な航海士）のエピソードは、アフリカのというよりキューバの素材といえるかもしれない。

12 オツルボン・メイユ *Otrupon Meyi*

II II

II II

I I

II II

(例1)

陸のどろ亀と海亀が話していて、喧嘩になった。

海亀は自分のほうが大きいので、お前より格が上だ、と言いはなった。

そこで、どろ亀はオルンミラの家に行き、占いをしてもらい、生贄をささげた。

それでも、海亀はいじめをやめなかった。

「お前はいくじがないから、川で餌をとればいい」とか、「お前の甲羅は大

きくならない。おれの甲羅はお盆にもなるぞ」とか言って。

どろ亀は答えた。「ぼくの甲羅は、お盆よりも、もっと大切なスプーンになるさ」と。

その口論の最中に、1匹の蟹がやってきて、斧で二人の足を1つずつ切りとった。

二人は命からがら逃げのびた。

しばらくして、二人は出会ったが、どろ亀の足は何ともなかったが、海亀の足は欠けたままだった。

オルンミラがもたらした治癒力のおかげで、どろ亀は海亀より優れていることを証明したのだった。

注釈1

どろ亀と海亀の戦い。通常であれば、図体の大きい海亀の方が優勢であるが、オルンミラのイファ占いと、どろ亀の「エボ」のおかげで、どろ亀が勝利する。奴隷のように、植民地で圧倒的に不利な者が、どうしたら負けないでいられるか。両者は直接戦うわけではなく、第三者（蟹）が介在して、両者に平等のダメージを与える点が注目に値する。一見して力の弱い者が戦わねばならない場合（例えば、職場のハラスメントとか）、当事者でない第三者（弁護士、第三者委員会）を介在させるべきという、現代的なメッセージも読み取れる。したがって、この神話は、キューバのディアスポラの民の神話にふさわしいといえるかもしれない。

13 オツラ・メイェ *Otura Meyi*

I I

II II

I I

I I

(例1)

オリチャ・オコはオコの国の王になってすぐに、ある問題に直面した。畑に播種したものがすべて、翌朝には、何者かに食べられてしまうのだった。そこで、オリチャ・オコはオルンミラに相談にいき、占いをしてもらおうと、この運勢が出た。

イファ（ご宣託）は、ある隠れた者が、お前が昼に蒔いたものを夜にむさぼり食っている、と伝え、神に生贄をささげるように言った。それから、夕暮れどきに、他のすべての食材と一緒に2羽の病気のハトの血を畑にささげて、監視を始めなさい、と。

オリチャ・オコは言われたとおりにした。

すると、どうだろう、明るい色をした、何百もの小さな「オコト」が、穀物を食べにきたのだ。そして、生贄をささげたところには、8匹の「オコト」がいた。体がとてつもなく大きく、首謀格のようだった。かれらは全員、生贄の魔法によって麻痺していた。

オリチャ・オコは、「オコト」をとらえ、袋の中に入れて、オルンミラの家を持っていった。オルンミラはなんて言うだろうか。

オルンミラは占いの道具オクエレを使って、オソデ占いをした。

すると、また同じ運勢オツラ・メイェが出たのだった。

問題はすべて解決したよ、とオルンミラはオリチャ・オコに言った。

そのとき、驚いたことに、袋の中に入れてあった「オコト」たちが歌いだしたのだった。

Orishaoko Oja Mi Ni Korokoto Aun To Mo Ni Yo Korokoto

オリチャ・オコ オハミニ コロコト アウン トモニヨ コロコト

「オコト」たちは、オリチャ・オコの言葉をしゃべっていた。

二人は驚いて、バッグから「オコト」たちを取りだした。

「オコト」たちは、自分たちがとても強靱な「地球の精」の化身だと言った。
「カオロ」の土地で播種を望むなら、死神の家臣である精霊と協定を結ばなければならない、と言った。

そこでオリチャ・オコは、死神と協定を結んだ。

その日から、「オコト」たちはオリチャ・オコの植栽から悪い植物を取り除いた。

それからは、畑での種子の受精を聖別するために、死神とオリチャ・オコの、夜間での主権のしるしとして、8匹の「オコト」がオリチャ・オコの農場の囲いの中につるされることになった。

注釈1

大地の精霊「オリチャ・オコ」をめぐるエピソード。小さな「オコト」*okoto*とは、カタツムリのことである。「地球の精」の化身であるカタツムリに助けられて、豊作がもたらされる。それというものも、「オリチャ・オコ」がオルンミラの占いを二度おこない、「エボ」の鳩の血をささげたからである。「カオロ」*kaoro*、とは19日の雨と一緒に耕した土地のこと。

オコ(大地)という舞台や、オドゥア(またはオドウドゥア)の地球創造神話(アフリカのイファの「ババ・エヨベ」の聖句)にも出てくる原初の生物カタツムリの活躍など、アフリカ色が強い。

「オクエレ」*okpele*は、簡易な占いの道具で、ババラオウたちが近未来の「オンデ占い」*osode*をするときに使用する。

14 イレテ・メイェ *Irete Meyi*

I I

I I

II II

I I

(例1)

オルンミラは、人間の男たちの中で生きることを望むメス猿のために占いをしてあげた。

しばらくして、メス猿は人間の女の姿をとり、ある男を甘い言葉でかどわかし、結婚した。息子が生まれた。ただ、乳児だけは本当の姿になってしまった。

メス猿はこっそり夫と息子の料理を食べてしまった。

夫は自分の妻が気に入っていた。

妻はいった。「貧しい人よ。息子とわたしのために食べ物を持ってきてください。もう一度、ユッカ芋とさつまいもを」

夫は低地の畑で大変な作業をおこない、片足が病に侵されてしまった。とても大きな傷ができた。

子どもは言葉を覚えて、自分が知っていることを父親に話した。

隣人たちが二人の会話を聞きつけ、あの女は殺すべき悪魔だと口々に言った。

人々は川から水の入ったかぼちゃを頭に乘せて帰ってきながら、^{エグンゲン}死霊の歌を歌いだした。すると、その女は元のメス猿の姿になった。

人々はその猿の頭を切り落としたのだった。

注釈1

変身するメス猿のエピソード。メス猿がオルンミラに占いをしてもらったことは出てくるが、「エボ」については言及されていない。おそらく「エボ」をしなかったのだろう。最後は死霊のせいでもス猿の変身が解けてしまい、第三者によって首を刎ねられてしまう。キューバに「エグンゲン」*egungun*の仮装舞踏は根づかなかったので、アフリカのバージョンに近いのかもしれない。

15 オチェ・メイェ *Oshe Meyi*

I I

II II

I I

II II

(例1)

オルンミラは、ある奴隷の男のために占いをしてあげて、敵に勝つための分別を与えた。

奴隷の男は「エボ」をささげ、すぐに養蜂の技術を学び、3ペソを得ることができた。

奴隷の男は掛け小屋にやってくると、その中では誰もが眠っていた。それで、低い声で歌った。3ペソを煮込み鍋の中に隠した、いつかも3ペソを隠した、と。

たまたま、別の奴隷の男が「自由」の権利をお金で買おうとしていたが、その歌を聞きつけ、16枚のコインを持っていながら、その金を盗もうとした。

養蜂家の男が、奴隷のオークションに気づき、夜に出かけて行って、歌いだした。ここに16枚のコインがある、月曜にはもう16枚のコインを置くだろう、と。

盗人は、どうせ24時間たったら、お金が2倍になると信じて、自分の16枚のコインを置いた。

こうして、養蜂家の奴隷は、自分の金を回収した。

注釈1

盗人と養蜂家の知恵比べの様相を呈するが、実は「自由権」を求める奴隷同士の争いの話だ。植民地の奴隷は、金で自分の「自由」を買い取ることができた時代があった。もちろん、大半の奴隷は無報酬で、さとうきび畑で働かされた。この「神話」には、奴隷たちの自由への飽くなき願望が隠されていて、知恵を使って自分のお金を回収する「賢い」奴隷も、それを奪おうと

する「せこい」奴隷も、わたしたちは笑うことはできない。ここでも、イファ占いと「エボ」の重要性が説かれている。

16 オフン・メイェ *Ofun Meyi*

II II

I I

I I

II II

(例1)

オルンミラはある病人にイファ占いをしてあげて、きちんとした医師を見つけるために、神に生贄をささげるように指示した。

病人は胃腸に深刻な問題を抱えていて、その医師はこのまま行けば確実に死ぬので、それを防ぐために飲酒を禁じた。その医師は、誰よりも博識だった。

だが、病人はもう一人の、知識は劣るものの、もっと深遠な金言を吐く医師を見つけた。

その医師はこういった。「飲みたいものは何でも飲んでもよろしい」と。

当然のことながら、病人は死ぬことになった。

死ぬ直前、病人は最初の専門家を呪い、二番目の賢者を讃えることができ、大満足だった。

注釈1

病いの治療をめぐるパラドクシカルな寓話。不治の病いを抱えた患者にとって、プロの専門家のアドバイスは正しくても、生きる楽しみを失わせる。それに対して、プロとしての知識は劣っていても、生きることの楽しみを優先させる知患者のアドバイスは、病人を満足させる。生きるとは何かを問い、ただ生きているだけの無意味さを否定する。キリスト教徒のように来世を頼みにできない奴隷、今を生きざるを得ない奴隷ならではの思想と言えないだ

ろうか。

(例2)

ある猫がいろいろな土地を旅したくて、オルンミラの家に行き占いをしてもらった。

すると、たちまち馬を買うだけの大金がたまり、その馬に乗って旅に出た。だが、馬に乗る方法を知らなかったので、馬の背中に自分自身をロープで縛りつけた。

悪魔の土地にやってくると、悪魔の息子が馬に乗っている猫を見て、後ろから馬の尻尾を引っ張った。馬の背中でバランスを取ろうとしがみついた。馬はひと蹴りして、悪魔の息子を殺してしまった。

怒った悪魔は、その報告を受け、猫を殺そうとした。

だが、猫は実の息子のようにあなたに仕えます、と悪魔に約束した。

二人は契約を結んだ。猫は魂を悪魔に渡し、悪魔はその代わりに、7つの命を猫に与えた。

注釈1

悪魔と猫との取引をめぐるエピソード。猫は、悪魔に魂をあげる代わりに、7つの命をもらう。猫は、イファ占いのおかげで大金を得て、馬を購入。

「エボ」への言及がないが、おそらく「エボ」をしなかったので、幸運は続かない。まず馬の乗り方がわからない。悪魔の子どもが死んだのは、子どものいたずらがきっかけで、必ずしも猫のせいではないが、悪魔に殺されたくないの、仕方なく悪魔との取引に応じざるを得ない。殺されるか、魂を売るか、の二択で、本来ならば、どちらもしたくないが、マシな方を選んだわけである。

ゲーテの『ファウスト博士』では、博士は、現世でのあらゆる快楽を味わい、さらなる知識を手に入れることができるという条件で悪魔に魂を売り渡

す。同じ悪魔に魂を売り渡すのでも、自分の欲望（知的、物的）のために喜んで誘惑に乗ると、この猫のように、仕方なく売り渡すのでは大きな違いである。そうした仕方なく二択から一つを選ばざるを得ないシチュエーションに奴隷たちの環境が示唆されていないだろうか。

「神話」の登場人物

オルンミラ *Orunmila* キューバではオルーラ *Orula* とも呼ばれる、イファ占いを司るオリチャ。

オロフィン *Olofin* この宇宙の絶対神がオロドゥマレ *Olodumare* ならば、それが人格化された存在。

エチュ・エレグア *Eshu Elegua* 戦士のひとり。旅を司る、変身を得意とするトリックスター。

チャンゴー *Shango* 雷、太鼓、生殖を司るオリチャ。

イエマヤー *Yemaya* 海の女神で、母性を司るオリチャ。

オチュン *Oshun* 川の女神で、恋愛やお金などを司るオリチャ。オチュン・イユム *Oshún Iyumu* は数ある化身（アバター）のひとり。

イベジ *Ibeji* 双子のオリチャ。

オグン *Ogun* 鉄や産業文明を司るオリチャ。戦士のひとり。

オリチャ・オコ *Orisha Oko* 大地と農業を司るオリチャ。

引用文献

Bascom, William. *Ifa Divination: Communication between Gods and Men in West Africa*. Bloomington: Indiana UP, 1969.

Brandon, George. *Santeria from Africa to the New World : The Dead Sell Memories*. Bloomington: Indiana UP, 1993.

Murphy, Joseph H. *Santeria: African Spirits in America*. Boston: Beacon Press, 1988.

中沢新一「解説」小松和彦『異人論—民族社会の心性』ちくま学芸文庫 1995年